

へき地教育プログラムの必要性と構造化の取り組み ～へき地教育実習・講義の体系化と教育効果を中心に～

川 前 あゆみ

(北海道教育大学釧路校)

Necessity of Rural Education Program and the Effort of Structurization : Systematization of Rural Education Teaching Practices & Lectures and the Educational Effect

Ayumi KAWAMAE

(Hokkaido University of Education Kushiro Campus)

概 要

本研究では、現代の少子化の中でへき地・小規模校における実習・講義の必要性をとらえるとともに、それらを体系化したへき地教育プログラムの構造化の実践をとらえた。また、へき地校やへき地教育全体の理解に果たす役割及び教職意欲などの教員養成全体に果たす可能性を明らかにした。その典型事例として、へき地教育の体系的プログラムを推進している本学のへき地教育プログラムの全体構造を取り上げ、体系化の理念的特徴とその教育的効果を明らかにした。教育的効果に関しては、相関性は見られても精緻に因果関係を実証することは難しいが実習指導とプロセスレコードの中から想定できる可能性をとらえている。本稿では、へき地教育プログラムが段階的なへき地教育理論とへき地教育実習を経て、市街地で当たり前だと思っていた教育実践をも相対化して少人数指導の観点と方法を意識させることになり、結果として教職意欲を高め、教育観・指導観を広げる重要な契機となっていたことを明らかにした。

1. 研究の課題と方法

(1) 研究課題と方法

本論文の課題は、実践研究の一環として、現代の少子化の中でのへき地・小規模校の実習・講義の必要性をとらえるとともに、それらを体系化したへき地教育プログラムの構造化の実践を紹介することである。またそれが、へき地校やへき地教育全体の理解に果たす役割及び教職意欲などの教員養成全体に果たす可能性をとらえることである。その典型事例として、へき地教育の体系的プログラムを推進している本学のへき地教育プログラムの全体構造を取り上げ、体系化の理念的特徴とその教育的効果をとりえる。教育的効果に関しては、相関性は見られても精緻に因果関係を実証することは難しいが実習指導とプロセスレコードの中から想定できる可能性をとらえている。

全国的に過疎化・小規模校化が進み、へき地小規模校の教員の定着化や少人数に対応した学習指導・学級経営および学校運営が求められている。なぜなら、へき地・小規模校には若手教師が定着したがらず、また少人数・複式指導に慣れていないために、単式学級と同じようには指導できないからである。

教員養成段階においてへき地教育の担い手としての若手教師を養成する上で、一般的な教員養成の実践的指導力の

向上策に加えて、へき地・小規模校の独自の課題に対応した、へき地の教師教育の体系的な教育課程が必要となる。本来的にはへき地の若手教師の育成は、中堅層の人事システムや若手教師研修システムなど、長期的・複合的に考えなければならない。しかし、若手教師を輩出する教員養成段階においても、小規模校化と少人数指導に対応した実践力の育成と、そのための市街地とは異なるへき地地域での実習を構造的に設定する必要がある。

さらに、各地域によって生じる教育格差についての実態を学生が教職課程で学ぶ機会が得られていないことが指摘されている(注1)。よって、その一端にある地方の小規模校での実践を知ることは教師を目指す学生にとっても得難い経験となる。

これまでの先行研究では、和歌山大学の「へき地・複式教育実習」、琉球大学および長崎大学の「離島実習」などがある。このようなへき地・複式・小規模校教育実習は、全国的な少子化・過疎化に対応して、少しずつ取り組む教員養成大学が増えている。これらの実践事例を踏まえながら、今後過疎化・少子化が激しい県においては、教員養成課程のカリキュラムに位置付けて組織的に展開していく必要がある(注2)。

本学では、平成18年度の大学再編を契機にして、へき地教育実習・へき地教育講義・事前指導などを配置しつつ、

体系化されたへき地教育プログラムの構築を目指してきた。

へき地教育プログラムの構成要素である実習・講義等は、毎年改善を加えながら、その分析を積み重ねてきた。すなわちこれまで分析してきた検証は、10年間のへき地教育プログラムの創設過程におけるアクションリサーチ的な分析である。

10年間のへき地教育プログラム創生期を経て、個々の検証を踏まえながら、再度へき地教育プログラム完成期での包括的評価をする必要がある。同じ実践でも、個々の要素を集積して俯瞰的な観点からその意義と効果を再評価していく。

本実践研究では、へき地教育プログラムの構造化に向けた一つの実践体系として、本学で展開しているへき地教育カリキュラムの全体と、その中での講義・実習の体系化の取り組みを紹介する。その上で教員養成において、へき地教育プログラムが果たす教育的効果をとらえていく。その検証方法は、一部ではあるが、実習後のアンケートの統計的な量的調査、個別の実習記録のプロセスレコード、およびナラティブなインタビュー調査による質的調査の分析からとらえていく。

調査法においてもすでに10年間のへき地教育プログラムの基本的な要素であるへき地教育実習・へき地教育講義等の効果を質的量的調査による多角的視点で実証研究を進めてきた。本稿では改めてそれらの総体としてのへき地教育プログラムの評価を行った。

これらへき地教育プログラムの再評価によって、学生がへき地・小規模校の学級経営・学習指導方法等を会得するとともに、へき地・小規模校への赴任抵抗感がなくなり意欲的に赴任する意識の向上が改めて確認できた。また、へき地・小規模校の特性を積極面として活かそうとする意識の向上が確認できた。さらに、へき地教育プログラムを受けた学生は、教師になろうとする教職意欲全般を高めていること、市街地小規模校にも応用できる可能性をとらえていること等の効果も確認できた。

(2) へき地教育プログラムの構造化研究の観点

教師教育の理論と実践の往還の観点を踏まえ、へき地教育プログラムの構造化に関しても、体系化の理念型を踏まえる必要がある。へき地教育プログラムの構造化の理念的な観点としては、1) 学年進行による実習内容の発展、2) 短期から長期の体験、3) 子ども理解の感動的な触れ合い経験から授業実践や生徒指導の実践、4) へき地理論と実践の往還の展開、であり、この観点から本学のへき地教育プログラムの全体構造と位置付けをとらえる。

本学のへき地教育プログラムは、以下のように構造化している。

- ①へき地教育の理論的な講義と実践的な現場体験・実習は段階的に併行して実施する。
- ②へき地で暮らす子どもと触れ合う感動的な子ども理解体験を1年生の最初に位置付ける。

- ③学年進行でより短期体験・実習からより長期体験・実習を設定する。(1日体験・1週間実習・2週間実習)

- ④主免教育実習では大人数級を経験し、その後へき地・小規模校体験実習を設定し、比較できるようにする。

- ⑤3年生では、「へき地教育実践論」の講義・模擬授業を設定し、実践的な指導方法を学修する。

このようなへき地・小規模校のプログラムの実践研究は、全国的に学校の小規模化が進む中で、今後本学だけでなく全国的な課題となりつつあると考えている。2016年時点で全国で5学級以下の小学校は、11.4%あり、へき地指定校は3000校ある(学校基本調査)。これらのへき地・小規模校の教育指導方法に関しては、複式学級編制による学習指導の難しさや、少人数の教職員による学校運営の困難さがある。これらの課題に独自に対応できる方法を学び、全国的な少子化・小規模校化に対応した取り組みが求められている。

そのため本実践研究を一つの問題提起として、教員養成課程において、へき地校体験実習の体系的な実習の導入意義をとらえるとともに、試行的にも導入する必要がある。へき地校体験実習での指導方法の気付きは、へき地小規模校での指導力を養成するとともに、教師と個々の子どもとの関係の濃密さや少人数の中での子どもの社会性の育成など、教師の教育観全体に影響を与える内容を有している。すなわちへき地教育プログラムが、子ども理解と個に応じた教育の理念を広げる可能性を有している。このように体系的な教育課程としてのへき地教育プログラムは、第1に、へき地教育の担い手としての若手教師の養成の役割を有する。第2に、へき地への教員養成・定着に加えて、へき地に留まらない教師の教育観の拡張の可能性を有している。このことから本研究では、教員養成段階におけるへき地教育プログラムの構造化の必要性和学生の教育的効果をとらえていく。

2. へき地教育プログラムの構造化と運営

(1) へき地教育プログラムの構造化の必要性

本学では、2006年度の大学再編において、教員養成課程を担うキャンパスでは、カリキュラムにへき地教育を位置づけ、へき地教育に関する学生の講義と実習の体系化を構築できるよう、創意工夫を重ねながら現在に至っている。まずへき地校体験実習の学年進行による体系化とその教育的な効果は以下の通りである。

教員養成系大学では通常、4年間の教育課程の中で、教員免許状取得のために定められた科目等が配置されている。主要免許状については5週間の実習が定められているが、Kキャンパスでは選択必須科目としての「へき地校体験実習(I・II・III)」をカリキュラム上に位置付けている。

Kキャンパスでは、2種類のへき地校体験実習を開講している。1つは、2年次に受講が可能な1週間の「へき地校体験実習I」である。もう一つは、3年次の「へき地校体験

実習Ⅱ」、4年次の「へき地校体験実習Ⅲ」である。3・4年次が受講する実習は、5週間の主免実習を修了した学生を対象として、10月から11月までを実施時期としている。期間は、2年次より1週間も長い2週間を設定している。2週間の中で教壇実習を中心に、小学校配属では7時間から10時間、中学校配属では5時間程度を目安として学習指導案の作成と授業実践も行っている。

このへき地校体験実習を段階的に位置付けている背景には、北海道は、へき地指定校が約40%、さらに複式学級を有する学校も約30%あり、へき地校に必ず赴任するという地域性がある。北海道の179自治体では、第一次産業を基幹産業にする自治体が圧倒的に多く、教職約40年の中の早い段階でへき地校に赴任する機会がある。初任で着任する者もいれば、2校目に異動したときに複式学級担任を担う若手教師も多い。さらに少子化が進む中で1つの自治体に小学校と中学校が各1校しかない町村も増加傾向にある。このような現状からすれば、学生時代にへき地校・小規模校の学校現場の実際の現状を学ぶ必然性も生じている。このことから、本学では、教員免許状取得のための選択必須科目としてへき地教育プログラムを開講している。

このように、4年間のへき地教育プログラムの体系化のプロセスと実習に参加する学生の事前事後指導の状況を踏まえて、次項では、多様な場面での学生の教育的効果をとらえたい。

(2) へき地教育プログラムの学年別の内容と構造化

へき地教育プログラムの構造化については、【図1】に示すとおり、学年段階によって様々な講義と実習が用意されている。

1年次の講義（理論）では、ほぼ全員が、はじめて「へき地教育」という言葉から学んでいく講義が位置づけられている（資料1）。特に学生の出身校・出身地は、ほとんどはへき地出身ではない。このため、へき地のイメージもマイナスイメージが強く、そのイメージの転換が不可欠である。

	理論	実習
4年		へき地校体験実習Ⅲ : 訓(2週間)
3年	へき地教育実践論	へき地校体験実習Ⅱ : 訓(2週間)
2年		へき地校体験実習Ⅰ : 訓(1週間)
1年	地域文化論Ⅰ (へき地教育論)	新入生研修 (へき地小規模校1日訪問)

図1 へき地教育プログラム

そのため、例えば、「へき地のマイナスイメージ」を抽出し、そのマイナスイメージをいかにプラスに評価しとらえ直すことができるか、のとらえ直しの交流を行う。この観

点を変えたとらえ直しを通じて、へき地のマイナス面とっていた特性を、評価の観点と基準を変えることによって、プラスに活かせるという“パラダイム転換”を実践する。これにより、へき地教育は実践の改善によって積極面が発揮できるという少人数指導のパラダイムの転換を目指していく（資料2）。このような講義を4月から進めた上で、5月下旬に1年次全員が「新入生研修」としてへき地小規模校に1日赴く研修を実施する。

さらに、2年次の「へき地校体験実習Ⅰ」では、夏季休業の8月20日～9月下旬までの1週間において、市街地の日常生活とは異なる地域性を持つ農漁村に住み、地域と密接につながったへき地校での実習に参加する。

そして、「へき地校体験実習Ⅱ」（3年次）・「へき地校体験実習Ⅲ」（4年次）では、主免実習を終えた学生を対象に、10月～11月までの2週間においてへき地校の教壇実習を中心に実習を行う。学年による実習内容の違いは、段階的に実習を高度化するためであり、端的に言えば実習の中心を観察実習か教壇実習におくかにある。

理論を含めた講義面では、3年次前期には、へき地教育の専門科目である「へき地教育実践論」の中で、複式学級の模擬授業も導入している。日本の学級編制基準では、2個学年を合わせて16人までの少人数になると複式学級編制となる。その複式学級の中での異学年指導法の学習をする。この異学年指導を教師役や児童役を演じながら模擬的に学んでいく講義を位置付けている。

理論的な学習では、1年次講義では少人数指導の多様なイメージを観察しながら創造し、3年次講義では、1年次からの学校訪問を積み重ねた上で、いかにへき地指導の実態を把握し、体験的に自分の指導力を修得していくかを目的に示しており、学びの質的な相違がある（資料3）。

(3) へき地教育プログラムの実習運営と年間スケジュール

	年間計画	アドバイザー	センター	各校実習委員会等
4～5月	実習生募集ガイダンス 実習生募集受付・個人面接実施	◎	○	○
5～7月	実習オリエンテーション 全体事前指導 実習校ごとの個別指導	◎	○	
8月	実習直前指導	◎		
8～9月	1週間現地に滞在して実習	○	◎	○
9～11月	実習手帳の整理・事後指導 (訓練校2週間実習)	◎	○	○
10～12月	事後指導(訓練校2週間実習)	◎	○	
12月	学内実習報告会の開催 総括レポート提出・実習評価	◎	◎	○

図2 へき地校体験実習の年間計画

年間のスケジュールは【図2】の流れで、実習参加と配置校が決まってからも、しばしば現地に赴くなどして、複

式・小規模校指導の方法を想像し、実践計画を練ることになる。

3. へき地教育に関する学生の意識変容と教職意識の喚起

へき地小規模校での実習に参加した学生の意識は、学年段階によってもへき地教育実践に対して意欲的な意識傾向が見られる。1年次のへき地1日訪問の中でへき地教育に関心を持った学生の中でさらに興味を持った学生は2年次の「へき地校体験実習Ⅰ」に応募する。そして、3年次の主免教育実習を経て、へき地小規模校の実践をさらに深め、へき地校に赴任しても良いと考える学生は、「へき地校体験実習Ⅱ・Ⅲ」に応募する。

(1) プロセスレコードから見た全へき地実習生の意識の質的向上

分析の方法として毎日の記録の気づきをとらえるプロセスレコードを全学生・全日程の過程を分析した。紙幅の関係で全プロセスレコードを紹介できないが、全学生のプロセスレコードから、①2年次における実習の効果、②3・4年次における実習の効果(資料4)、をとらえ、学年によるへき地意識の向上と指導視点の深化をみた。

(2) へき地教育実習の意識深化の過程と教育効果

学生の意識の深化としてとらえられることは、大別すると、以下に示した3項目が主な内容であった。特に「へき地校体験実習」に参加した学生は、へき地小規模校の指導方法・運営方法の特性に気付くだけでなく、へき地の担い手としての教職意識の変化もあった。これらは学生の毎日のプロセスレコードからみる気づきの記述、および実習感想文の記述からとらえることができる。

- ・へき地小規模校の実態と指導方法の認識
- ・小規模校化する中での少人数指導方法の習得と少人数教育課題の気づき
- ・学生自身の教職意欲への喚起を促す

学生の多くが、元々都市部や市街地地域の学校で育った学生が多いため、1週間や2週間といったへき地小規模校での実習によって、小規模校の指導方法をまず知るといった経験に新鮮さをもつ。また、日本全体の小規模校化の課題の中で、ある意味ではへき地小規模校教育を学ぶことで、全国の小規模校化の中での教育課題解決の方向性を応用的にとらえられることに気付く。

へき地小規模校では、“子どもの多面的な関係性の向上”や“一人一人の学びの保障”など、抽象的にとらえていた教育理念についても、へき地小規模校の実習を経験する中で、その意味と具体的な少人数指導方法が見えてくる。そして自分が育った市街地の学校のあり方が当然だと思っていたことが、へき地小規模校を経験することで学校の「常識」が転換していく。自分が育った学校・地域との学級規模・学習集団の規模の違い、および少人数指導の新しい方

法の魅力に気付き、自分の教師像を改めて構築していく機会を得ている。

(3) 3・4年次におけるへき地教育実習の意識の発展と教育効果

主免実習を終えた3・4年生の視点では、複式学級における学習指導・小規模校の教育経営について以下の6点にまとめられる。

- ・複式授業・少人数指導における教材・教具の工夫
- ・少人数の学級経営・教室環境における座席の配置・複数黒板の工夫
- ・過疎地域での地域を巻き込む読書環境・読書活動の工夫
- ・地域を活用したコミュニケーション力を高める工夫
- ・社会性を身に付けるための生徒指導の工夫
- ・地域行事参加による保護者や地域との共同性の大切さと学校の役割を知る機会

この中では、少人数のマイナス面を克服するための工夫、及びそれを通じて少人数の良さを伸ばす指導方法の工夫を通じて、へき地小規模校の良さを全体として伸ばす方法をとらえている。これによってへき地教育の担い手としての具体的な実践方法を学ぶ意欲を高めるとともに、へき地への教育観・指導観が転換していくようになる。これは特に主免実習で市街地での指導方法を経験した上で、指導方法を比較認識できた経験が大きい。

このように主免実習を終えた学生は、市街地での実習経験と、へき地小規模校での実習経験を対比しながら、小規模校の少人数の中での創意工夫された学級経営・学校経営や学習指導の工夫の中で、対比的に学びを深めている。上記にあげた視点については、小規模校での実践の工夫が、さらに大規模校や市街地での学校での実践課題にも工夫することで応用できる手法であることに学生自身が気付いていた。これらは多くの学生が、「へき地校での新しい実践は市街地・都市部でも使える」という感想を持っていることでも明らかである。これにより、へき地校体験実習の参加者は、教師になりたいという教職全般への意欲にも繋がっている。

(4) へき地校体験実習の参加と教職意識

へき地校体験実習への参加動機は選択必須科目であることから、元々学習意欲が高い学生が受講している。したがって、学修意欲が高い学生が、その気づきを得る契機を通じて吸収意欲がさらに高くなることは当然予想される。すなわち元々高い教職意欲を持つものであるから教職意欲が高いのは当然であるという意見が当然出るであろう。

しかし、へき地出身ではない学生が多い現実からすれば、へき地校体験実習のような経験がなければ、たとえ教職意欲が高い学生であっても、へき地教育への担い手意識や教職意識が高くなるわけではない。むしろへき地教育の学修やへき地校赴任意識が、へき地への抵抗感を高め、教職意欲を下げることも予想される。

逆に、へき地の少人数の中で子どもとの関係づくりや子どもどうしの関係、少人数指導方法について新しい観点を身に付けることで、それが教職意欲にもつながるととらえることは、プロセスレコードからも一つの仮説として成り立つであろう。実際にへき地校体験実習参加者の教職就職率も高い。

4. へき地教育プログラムの可能性と今後の検証課題

本実践研究では、全国的な過疎化・少規模校化の中でのへき地教育プログラムの必要性和学年進行によるへき地教育プログラムの体系化の実践理念を紹介するとともに、へき地に関する意識変容の質的違いの可能性を試みてきた。

第1に、新入生時のへき地校体験を通じて、へき地小規模校の子どもたちと短時間でも密接に接する子ども理解の感動的な体験を通じて、へき地小規模校への親しみを感じている。

第2に、この感動体験と併行して、「へき地教育論」講義でへき地の特性理解と、マイナス面をプラス面に活かせるパラダイム転換の観点を学ぶことで、よりへき地教育の積極面への意識転換を図ることができる。

第3に、1年次に最小限へき地に興味を持った学生が「へき地校体験実習Ⅰ」に応募し、へき地小規模校の地域との関係や少人数の指導方法があることを理解し、市街地の出身校の経験などを相対化できる。このことがへき地小規模校への関心を高めていく。

第4に、3年前期には「へき地教育実践論」の講義などで、多様な少人数指導方法を実践的・理論的に学ぶことで、学級規模と人間関係の状況に応じた指導方法の多様性を学んでいる。

第5に、市街地の主免実習を経た後で、3年次後期の「へき地校体験実習Ⅱ」を取得することにより、基本的な指導方法を習得した上で、へき地の独自の指導方法の良さと方法を実践的に学ぶことができる。さらにその特性は結果として、市街地にも応用できることを感じ、さらに教職意欲を高めている。

これらを通じて、段階的なへき地教育理論とへき地教育実習を経て、理論と実践が往還的に発展していく。この理論と実践の往還は、一般的な教師教育の考え方であるが、さらにへき地教育プログラムは、市街地で当たり前だと思っていた教育実践も相対化して、少人数指導の観点和方法を意識させることになる。そのことが、教職意欲や新しい教育指導方法を意識させることになる。したがって、へき地教育プログラムは、結果として教職意欲を高め、教育観・指導観を広げる重要な契機となっていると言えよう。

今後の課題としては、さらに教員養成における主免実習等と区別したへき地教育実習の導入意義と効果を厳密にとらえる必要がある。そのポイントは以下の3点となる。これらは概ね質的分析として検証しつつあるが、量的な検証

を含めて更なる検証が不可欠である。

- (1) へき地小規模校への赴任と定着のために、へき地教育を担う学生の教職意欲を高めるへき地教育プログラム全体の方法和効果の検証を進めていく。
- (2) へき地教育の実践的な課題解決方法の開発とその教育効果をとらえていく。例えば、少人数グループ指導・複式間接指導・異年齢指導・ICT活用の個別学習・地域連携力等のへき地指導方法の開発、へき地教育指導方法を応用した指導方法の開発等である。
- (3) へき地小規模校教育実習等で個に応じたへき地教育を経験することが、教職の資質・能力の向上等の教師教育全般に与える影響と方法である。

全国的に過疎化・小規模校化が進行する中では、へき地教育プログラムは今後の地方の各県の一つの課題となってくることが予想される。上記の視点を通じて、へき地教育プログラムの各実践経験からの成果を交流し、またへき地教育実習等が教職意識を高めていくための教員養成の方法和課題について今後各県の実践的なモノグラフを積み上げていく必要がある。本実践研究はその議論の俎上にのせる萌芽的な問題提起としたい。

注

- 1) 松岡亮二『教育格差—階層・地域・学歴』ちくま新書、2019年、306-307頁。
- 2) 拙著『教員養成におけるへき地教育プログラムの研究』学事出版、2015年、37-44頁。
- 3) 本論文に用いた資料1～4は、拙著『教員養成におけるへき地教育プログラムの研究』学事出版、2015年、の調査法と同じであるが、データを最新版にして一部抜粋変更して提示した。

引用・参考文献

- 1) 拙著『教員養成におけるへき地教育プログラムの研究』学事出版、2015年、3-277頁。
- 2) 拙著他「へき地校体験実習」の教育効果と教師教育の実践的課題—北海道教育大学の取組を中心に—『日本教育大学協会研究年報第32集』2014年、71頁-82頁。
- 3) 拙著他編『豊かな心を育む へき地・小規模校教育—少子化時代の学校の可能性』学事出版、2019年、2-214頁。

資料1 「地域文化論Ⅰ（へき地教育論）」講義の主な内容

1回目～3回目	へき地のマイナスイメージとパラダイム転換
4回目～5回目	へき地小規模校の特性と現代の課題
6回目～8回目	へき地小規模校における社会性の育成とコミュニケーション力の向上
9回目～10回目	へき地小規模校の複式授業“わたり・ずらし”の特性と指導方法
11回目～15回目	へき地小規模校の地域性・小規模性を活かした学習・生活指導の可能性

注1) 2019年度新カリキュラムの1年生対象の講義科目名と主な授業計画。

資料2 学生によるへき地のマイナスイメージとその転換のイメージ

へき地のマイナスイメージ	へき地のマイナスイメージをあえて転換してみると	転換後の割合 (注1)%
何でも自分たちがやらなければならない。	自立できる。「誰かがやる」ではなく「自分がやらなければならない」。	90.8
地域行事が多い。	地域のコミュニケーションが多く取れる。	88.9
学校の生徒数が少ない。	全校規模で仲が良い。学校独特の行事ができる。	88.2
通学距離が長い。	学校まで探検ができる。毎日が冒険。体力がつく。健康に良い。足腰が丈夫になる。早寝早起きの習慣がつく。地域が協力して子どもを見守る。集団下校で社会性を養える。一緒に登校し友情が芽生える。	86.9
学年を超えて授業するのが大変。	教師にとって良い経験。1年後、1年前の予習復習ができる。少人数だから全員に細かく指導できる。教師としての力がつく。滅多にできない経験。枠を超えた新たな指導力が身につく。	86.3
家族での行動が多い。	家族でのコミュニケーションが増える。	85.6
子どもが少なく、お年寄りが多い。	昔ながらの知恵を学べる。地域の伝統が守られやすい。子どもが大切に扱われる。人付き合いが多い。少人数教育。子どもは宝。高齢者との交流が多い。	84.8

注1) 「発想を転換できると思う」「少し発想を転換できると思う」と答えた学生の合計割合を筆者が集計した。本稿ではそのうち、発想の転換意識が高かった項目を特に取り上げた。

注2) 2019年度「地域文化論Ⅰ（へき地教育論）」履修者数155名のうち当日の受講生（153名）に対して行った「へき地のパラダイム転換」に関するアンケートより集計。

資料3 へき地教育関係講義の理論的な内容

<p>地域文化論Ⅰ（へき地教育論）(1年次・前期)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・へき地小規模校と市街地大規模校の比較とパラダイム転換の考え方 ・へき地校の評価規準の転換とパラダイム転換 ・市街地大規模校のプラス面とパラダイム転換 ・へき地小規模校と行事開催や地域連携 ・少人数学級運営と社会性の育成と高め合う競争 ・教員の持続的な研修と方法
<p>へき地教育実践論（3年次・前期）</p> <p>【へき地教育実習の事前指導】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・複式授業の理念と方法 ・へき地の集団指導と個別指導の区別の理念と方法 ・少人数学習指導・学級指導の理念と方法 ・異年齢集団を活かした社会活動の方法 ・異学年学年別指導による複式模擬授業

注1) 2019年度の講義概要をシラバスから要点整理した。

資料4 へき地教育実習後の最終自由記述意見

<p>キーワード：【複式授業について】</p> <p>12. 複式授業を何度も行い、慣れることで、<u>時間配分や児童の実態をだんだんと意識できるようになった。</u></p> <p>17. 今回の実習では、<u>授業の内容、重要性について</u>しっかり考える機会になった。子どもたちの反応をしっかり見られる少人数学級だからこそ、<u>わからない様子の子の発言や思考を分析し深く勉強になった。</u></p>
<p>キーワード：【子どもの見取りについて】</p> <p>2. <u>子どもたちの様子を一人一人見ることができ、地域の特色を活かした授業も体験し地域の良さも感じた。</u></p> <p>19. <u>子ども一人一人を知り、理解するという姿勢は、少人数の学校が基本になる。</u></p> <p>21. <u>一人一人の居場所や役割が明確であるため、まさに子どもが主役の教育の姿を学ぶことができた。</u></p> <p>22. <u>子どもの思考を広げさせたり深めることの難しさを感じた。</u></p>
<p>キーワード：【教職員の同僚性・チーム力・教職について】</p> <p>5. 「<u>チームで頑張る大切さ</u>」を心から実感した。一人の思いを、子ども同士、<u>子どもと先生、先生同士連携していた。</u></p> <p>14. <u>教師の仕事や自分の生き方など、深く考える機会になった。</u></p> <p>16. 教師という立場は同じでも、<u>大規模校、中規模校、小規模校それぞれ教師の役割は変わってくると思った。</u></p>
<p>キーワード【<u>地域との関わり・人との関わり・へき地地域での実習生活について</u>】</p> <p>7. 授業づくりももちろん学べたが、<u>地域の人々との関わり</u>がありとても充実していた。</p> <p>26. <u>へき地で生活するもの、複式授業をしたもの、何もかも初めてでしたが、学校の先生方や地域の方々の温かいご支援のもと、充実した実習を送ることができた。</u></p> <p>27. 主免実習は大規模校だったので、<u>へき地実習に参加したことで、授業にとどまらず、学校、地域全体の様子を多く知ることができた。</u></p>

注) 資料4は、拙著『教員養成におけるへき地教育プログラムの研究』学事出版、2015年、より、データを一部抜粋のうえ本論文に改変して提示した。

【Summary in English】

The purpose of this study is to grasp the necessity of rural education teaching practices & lectures related to the rural small schools in today's declining birth rate and practice of structuralizing rural education program which systematized the practices & lectures. Furthermore, it clarifies the role in understanding rural schools and rural education totally and the possibility in total teacher education including the motive of the teaching profession. As a typical example, characteristics of the idea and the educational effect in systematization are demonstrated by introducing the overall structure of the rural education program in this university where promotes the systematical program. The educational effect is difficult to identify the minute causal relations among the elements even though the correlations are seen. However, it is possibly estimated through the guidance for teaching practice and the process record. This paper clarifies that educational practices in urban areas are also relatively seen, and the viewpoint and methods in small class teaching are positively recognized through the step-by-step learning process of the theories and teaching practice in the rural education program. Finally, this paper indicates that the program brings out significant opportunities to raise the motive of the teaching profession and to extend the views of education and teaching among the students.

【Keyword】

Rural education program, Practice study, Small school